

ローマの掏摸

こだま
みゆる
兒玉 稔

今夏、我等夫婦伊太利旅行にて掏摸に遭遇せり。但し、旅卷財布その他心当たりのもの全て手元に残りてあり。假に、覚え無きものを抜き取らることありとしても、實害は無しと言ふべし。

ある一日、ローマ地下鐵に乗りたり。電車ホームに入り、扉開き、我等乗込みて空席無きを見、ドア脇に妻と向合ひて立つ。我等に續きて乗込む者あり。容貌着衣ともに美麗なる二十歳程の娘、大きな目を黒く縁取りし可愛らしげなる頬を赤く塗る。肩にするバッグ不釣合に大と見ゆ。

電車發車せむとし、ドア閉ぢ始む。とその時、驅込み來りて閉ぢむとする扉に両手をこじ入れ無理に開く十歳程の少女あり。前の娘の妹らし。扉に夾まれ小さき悲鳴上げ藻掻きつつ遂には車内に入りおほせたり。周囲の乗客この騒ぎを一齊に注目す。

姉らしき彼女、少女に氣遣ひの聲をかけ、自分は列車の奥に入らむとする風情にて我等夫婦の間の狭き空間に分け入りたり。そのまま奥に向ふと思ひきや、然に非ずして妻と我との間に留まれり。三人が自づと身體密着の態となる。他人と身體を接するは通常不快なれども、一に娘の美形なる、二に全身より發する芬々たる芳香の芳しき、いかでか抗ふを得む。爲すに任するの外なし。

姉妹下車して後、ふと我が腰に著けたるウエストポーチを見れば、閉めたる筈のジッパー半開きなり。閉ぢ忘れたるかと改めむとするを、向ひの妻不審げに見る。その妻が前掛けするリュックサックを見るに、そのジッパー全開なり。

これ大變と、取り敢へず次の驛にて下車し、それぞれジッパーの中を確認す。幸ひにして失せたるもの無きが如し。貴重品を下に入れ、その上に傘ペットボトルなど置きたれば、盗人、更に下までは手を伸ばし難しと諦めしならむ。

やや安堵して頭を冷し考へ、出國前の旅行案内書や友人の注意忠告、ホテルフロントの警告を思ひ起こせばそれら全て當を得たるものなるに感じ入れり。

曰く、掏摸は列車内にては最も逃れ易きドア附近を好む（我等はそこに立てり）。曰く、掏摸は鞆や頭巾にてその行爲を隠す（我等が掏摸嬢はシヨルダーバックの蓋を用ゐて手元を隠したり）。曰く、旅行者丸出し感を憤み、足早に歩くべし（我等はガイド本を見つゝゆっくり歩き居り）。曰く、現地に慣るる頃が危険（我等この日ローマ五日目にて地下鐵路線を些か覚えその便利を樂しむ一方、當初の警戒心薄れてあり）

思ふに我等は、電車乗車よりはるか以前、煙草店にて切符を求めし頃より彼女らの標的基準に合格し、彼女ら我等の後ろを追ひて歩き、間一髪にて扉に夾まるゝ演技をして心配を誘ひ同時に警戒心を緩慢にせしめ、而して犯行に及びたるものなるべし。

被害無きは幸ひ。加之、妻の言ふやう、今思ふに車内、我が背後には怪しげにして倔強らしき男等異様な體勢にて立てり、と。

事前注意の一には當地の掏摸、徒黨を組みて犯行に及ぶこと多しとありたり。或はこれらの男も一味にして、我もし氣附きて娘を難詰せむか、亂暴沙汰も厭はじとの用意ありたるやも知れず。然らざりしを幸ひとし、氣分を直すべしと妻と合意せり。

然は然りながら、この娘、妻との間に無理に分け入りしその時、我、即座に不快を示すべかりしもの

を、むしろ其の儘にして咎めざりしこと大いに反省せざるべからず。我を若き女に甘からむと見定め
ての上の仕業と思はざるを得ざればなり。

(令和元年八月二十六日受附)